

第219回くらしの植物苑観察会 2017年6月24日(土)

-古代の薬草と東アジア-

三上 喜孝(本館研究部 准教授)

歴史的に「東アジア文化圏」とは、中国の文化的・政治的な影響を受けた朝鮮半島、日本、ベトナムなどの地域を指しますが、かつて東洋史学者の西嶋定生は、その指標を漢字文化、漢訳仏教、儒教、律令という4つの要素に求めました。しかし研究を進めていくと、それ以外にも、東アジアを特徴づける要素を見つけることができます。そのひとつが薬草などを含めた医薬文化です。中国で生まれた医薬文化もまた、朝鮮半島や日本列島にもたらされたのです。その意味で、東アジアは共通の医薬文化で結ばれていたといえるでしょう。

今回のお話しの出発点は、古代新羅の都が置かれていた韓国・慶州の雁鴨池という池から出土した1点の木簡です。そこには、薬物名とその数量が列記されていました。

- 大黃一兩〔九カ〕 黄連一兩 〔皂角一兩 〔青袋一兩 〔升麻一兩
・ □分
〔甘草一兩 〔胡同律一兩 〔朴消一兩 〔□□□一兩
・ □□□□ 〔青木香一兩 〔支子一兩 藍淀三分

308 mm×39 mm×36 mm

この中には、植物由来の薬物が多く含まれており、薬物名のほぼすべてが、中国の本草書に見えるものです。一方日本においては、この木簡と同時代の史料である東大寺・正倉院の「種々薬帳」などの古文書の中に、共通した薬物名を見いだすことができます。

雁鴨池出土の薬物名木簡は、中国の医薬文化が、日本列島にどのように伝わったかを知る手がかりとなる、重要な発見です。これまで、日本古代の医薬文化は中国の医薬文化をそのまま輸入したのではないかと漠然と考えられていましたが、そうではなく、朝鮮半島において中国の医薬文化がいったん咀嚼され、それが日本列島に伝わった可能性が出てきたのです。

考えてみれば、その痕跡がうかがえる文献史料は、これまでも存在していました。古くは『日本書紀』允恭天皇紀3年春正月朔条に「使を遣わして良き医を新羅に求む」、同年秋8月条に「医、新羅より至れり。則ち天皇の病を治めしむ」とあります。むろん伝承に過ぎませんが、医薬文化をめぐる朝鮮半島との関係を意識した記述であることには相違ありません。

また、欽明天皇15年2月条に、百済から易博士、曆博士らとともに「医博士」「採薬師」が渡来したとする記事があるのもよく知られています。さらには、朱鳥元年(686)4月戊子条に、新羅使節が、「薬物」を献じたとする記事もみられます。

なお、『続日本紀』天平宝字2年(758)4月己巳条によれば、医療系官人であった難波連奈良の遠祖徳来は、もと高麗の人で百済国に帰していたが、雄略天皇が百済国に才人を求めたときに貢進され、その後、その五世の孫恵日が唐で医術を学んだとあり、難波連奈良が半島系の渡来人の系譜をひく人物であったことがわかります。このほかにも、奈良時代の医薬系官人の中に、葛井連恵文といった半島からの渡来人とみられる人物もみえます。

雁鴨池出土の薬物名木簡により、8世紀の新羅における医薬文化の一端をかいま見られた意義

は大きいといえるでしょう。これまで必ずしも明らかではなかった、医薬文化をめぐる朝鮮半島と日本列島との関係を、具体的な形で示したもののなのです。

さらにこうした薬物の中でも、自生しない薬草については、新羅商人たちによって、奈良時代を通じて日本列島にもたらされたことが、正倉院所蔵の鳥毛立女屏風の下貼として使用された「買物解」から確認できます。薬草についての知識は、東アジアの人々の交流を通じて、共有されていったのです。



韓国・ソウルの薬令市

.....

次回予告 第220回くらしの植物苑観察会 2017年7月22日(土)

「縄文時代のウルシと漆」 工藤 雄一郎(当館研究部 准教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要